

変化が起こす変化(2)

村田 愛

ポジティブサポートは「変化」を生みます。今回はこの変化についてアダムの場合を紹介しました(註1)。さらにもっとアダム自身が「生きる手ごたえ」を感じられるようになるには、私たちが何を変えるべきか、具体的な形で変化を起こすことが必要だと考えました。

ポジティブサポートのセッションの特色は、本人の立

場で考えること、具体的な現実に基づいて具体的な発言を求められることが挙げられます。そして、ポジティブサポートを発端として可能性を追求し考え続ける多くのヒントやパワーを得ることができます。アダムの場合、これらのポジティブサポートの特色が有効に働き、大きな変化をもたらしました。ポジティブサポートを継続す

ることにより、現実の変化に対応して、新たに必要になる変化を的確に捉え、柔軟に対応していくことが可能となり、これらのことがアダムと周りの環境のポジティブな変化の連鎖を導きました。

前回の内容から

ポジティブサポートを提案した理由・期待したこと

六人の知的障害、おもに自閉症と診断された小学部の高学年クラスで実習していた時、アダムという生徒がいました。アダムはいつもニコニコしていて、立ち上がりクルクル回りながら優しく自分の頬を叩くのが印象的なハンサムな男の子でした。学校の個別教育計画書を提出しなければならぬ時、アダムのことがあまりにもわからずポジティブサポートを提案しました。過去の計画書を見ても、同じ内容のものが引き続き目標とされているだけのものでした。つまり、その計画は、あたかもアダ

ムは何も学ばずに何年も学校生活を送ってきたかのようにな不自然な物でした。しかし個別教育と掲げるならば、私はアダムにとって優先順位の高い、意味のある目標や計画を考え出す必要性を感じており、それに同意してくれたそのクラスの担当のスタッフと共にポジティブサポートを継続して行っていました。

ポジティブサポートは、その人をとりまく環境、すなわちアダムの場合家庭や学校で関わる人々に参加してもらいセッションを行うものです。アダムは、スクールバスで登下校するので、家族との接触がほとんどありませんでした。ポジティブサポートを行うことでアダムが何を望み、どのような人間関係の中で過ごしているかなど、家族の参加によって知りえることや、徐々に家族との協力体制ができることを私は期待しました。また、アダムの学校生活を家族に知ってもらえることで、よりアダムが過ごしやすい生活になるのではないかと考えました。しかし、家族は仕事やそれぞれの都合で、ポジティブサ

ポートに最後まで参加することはありませんでした。

ポジティブサポートを継続していく中で、私たちはアダムの「今」の現実を問い直していくこと、問い直しに基づいて変化させること、そして、またアダムと環境の持つ異なる可能性を考え具体化し、行動に移していくことに焦点を合わせていきました。それらをくり返し、その時その時の必要性、優先しなくてはいけないことに応じてアダムの生活をアダムと共に考えていきました。

一、「問い直す」Ⅱアダムにとっての意味、優先順位

アダム、クラスの担任のベス、アシスタントのグロリア、スピーチの先生と私で行っていたポジティブサポートでは、まず、学校内での時間についてそれぞれが持つアダムにとっての意味、そして優先順位を考えていきました。例えば、「アダムの興味・関心」という課題でポジティブサポートのセッションを行い、アダムはどれた

け教室にある物に興味を向けているか、それらのつながりという意味をわかっているか、そして、他に興味を向けているものが何なのかなど、話し合い、いろいろ試してみることから始めました。

スピーチのレッスンの時には、色や数の認識を主に行っていたのですが、アダムが自分の名前を認識することや周りのクラスメートの名前を認識するように変えました。アダムにとって一番日常的で生活に密着していることを優先し、数や色などそこから懸け離れたものは後回しにしていいのではないかと話し合いました。

そして、「アダムの表現していること」という課題でポジティブサポートのセッションを行った後、私たちはアダムが自発的に具体的に表現するコミュニケーション



の取り方が見つかっていないという決定的な問題に注目し、PECS（註2）を提案しました。PECSは、単語が絵と文字で正方形の枠に表示してあります。アダムにとって必要な意味のある単語を一つ一つマジックテープで貼り出すことによってアダムが表現したい単語を自分で取り出し相手に示すことができるようになっていくのです。

アダムの下校時に行っていたポジティブサポートのセッションにはアダムも参加していたので、一緒にそれぞれのポジティブサポートの段階を踏んでいる感覚を持っていたように感じられました。みんなの気持ちがいっても、アダムの今からつながらる次への展開／可能性に向かっています。アダムが自ら発することが出来る表現方法として、PECSを使用し始めた頃、私たちはアダムが意欲的に何かを取り入れようとしている姿を初めて見たように思えました。ポジティブサポートが終わりスクールバスに乗り込んだ後、アダムが窓越しに私たちに

笑顔で微笑みかけてくれることもありました。

アダム達は登校するとまず学校の大きな食堂で朝食をとります。その朝食は、日本でいう給食のようなもので、ビニールに入ったドーナツやジャムパンと牛乳が用意されています。ある朝、アダムが自分のドーナツを食べ終え、私の顔をニコニコ覗き込んでいたので「どうしたの？」と聞くと、アダムは「待ってました」という顔をして自信ありげに身に付けているPECSセットの中から「ドーナツ」を取り出し、嬉しそうに私に手渡しました。アダムが真剣に「言葉」を探し、目を輝かせて伝えてくれる姿が何とも嬉しく、思わずドーナツがどこかで余ってないか探してアダムにあげ、その幸せそうに食べる姿を見守っていたことを思い出します。

「アダムの考える姿を見るようになった」アダムの姿が変わってきたことを他のクラスの先生にそういう風に指摘されるようになったのもこの時期でした。

二、「起きた変化」 Ⅱ表現力が持つ力

受け身だけでなく、アダムから自発的に伝えられる方法を知ったアダムは、ボキャブラリーだけではなく、表現力が豊かになっていきました。アダムは周りの人への関心が出てきたようでした。人の顔を覗き込み問いかけたり、訴えたりするようになりました。

スピーチのレッスン中アダムが突然立ち上がり、不可解そうな表情で黒板の方へ向ったのでどうしたのかと見ていたら、出席を示す生徒それぞれの写真が貼ってあるところへ行き、クラスメートのヘレンの写真を剥がして担任の先生のバスに手渡しに行きました。その日ヘレンは風邪をひいてお休みでした。バスは写真を受けとりながら、「ばたばたしていて、伝えてなかったけれど、そう今日ヘレンは風邪でお休みなの」と言いました。今までその様に他のクラスメートに関心を示すことなく、クルクル回っているいつも穏やかなアダムの印象

が変わり始めた時でした。

次のステップとして、「アダムが表現したいことを相手を選ばず誰にでも必要な時に表現できるようにになるとアダムの人間関係も広がるね」とポジティブサポートの後に話

したと思っただけすぐに、アダムは自ら達成し、誰にでも要求したり伝えたりするようになりました。

教室の手作りの時間割りが黒板のわきに貼ってありました。それは、教室にある時計の絵で時間が表示されているものと、授業科目が絵と文字で示されラミネートされているものを、貼って組み合わせるようになっていました。授業が終わる度に生徒の誰かが剥がしてくれていたのですが、アダムが積極的に剥がしてくるようになってからはアダムの役割になりました。そうして、学校内での時間が、お互いに見通しが持て、スムーズに流



れるようになると同時に、アダムとのかかわりに手ごたえが持てるようになっていきました。ポジティブサポートを始める前には何に関心を持ち、何に心動かされるのかわからなかったアダムが、教室内にあるものや人に関心を持ち始め、また視覚的なものに意味やつながりがあることの理解を示してくれたのは初めてでした。

アダムにとっての問題

アダムは自分のPECSセットを身に付けたまま家に帰っていました。連絡帳には、家族がわかりやすいようにその使い方を簡単に示し、アダムが何かを欲しがったりする時はアダムに問いかけ、それを使ってコミュニケーションをとることを促していました。しかし、アダムはPECSセットを家に忘れてくるのが何度もありました。ある日、学校に着いて朝食を食べている時、アダムは泣いていました。その日も忘れてきてしまったのです。それは、アダムにとって過ごしにくい時間を意味し

ます。アダムは泣いたり、怒って自分の頬を叩いたりして忘れてきたことを表現するようになりました。アダムにとって、PECSセットが必要なものになっていたのです。その時の悲し気な顔からは、「アダムの表現」を失いどうすればいいのかわからない程の喪失感さえ伺えました。私は、必要なら自分で大切にしてい、忘れて来ないように気を付けてねとアダムに伝え、代わりに使えるようなものを用意しました。連絡帳にも、アダムがPECSセットを忘れないように気を付けてあげて下さいと書きました。

その頃、アダムの鞆の中に家族からのお手紙が入っていて、「家でこんなことは無かったのに、アダムが時々怒って自分の頬を叩いたり、物を叩いたりすることがある。このようになるのはどういうことなのか、そんなことが学校でもあるのか、学校で何かあったから家で暴れるのか。困っている」という内容でした。その時、家ではアダムとのコミュニケーションや関わりは何も変わっ

ていなかったことがわかりました。

三、協力度制の必要性

学校生活の中で、自分が表現することが相手に伝わることの満足感と充実感／達成感を感じるようになったアダムは、開けていく感覚を覚えていたと思います。彼の人生観や世界観もが変わったのではないのでしょうか。そして、彼のそのような変化を家族が受け入れてくれることを彼は必要としたのでしょう。彼の変化と共に、周りも変化することが求められていたのでしょうか。

私たちは家族に連絡を取り、学校でのアダムの意欲的な姿勢やコミュニケーションの取り方などを伝え、家庭でも使えるよう家庭専用のPECSセットを用意しました。アダムが不自由感を家族に表現できたたくましさも、家族から連絡をしてくれたことも嬉しく、私たちは何かが変わる期待を持ちました。

PECSセットに関しては、アダムが使いこなせるよ

うになってきているので、後は、家で使うボキャブラリーをアダム用のPECSセットに増やしていきたい、ということと、家族で積極的にアダムに問いかけ、やりとりをして欲しいと願っていました。

四、変える力

それからアダムが家で過ごしやすくなったことは、月曜日の登校した時の表情でわかりました。ある月曜日とても嬉しそうに登校し、クルクル回りながら私に抱き付けてきました。「何かすごく嬉しいことがあったんだ」と言う私の目を見て微笑みました。そして、「どうしたの?」と言うとアダムはPECSセットの中から若い男の人（お兄さん）を取り出し見せてくれました。そして、私が「お兄さんとこの週末どこかへ行ったの?」と言



うと、もう一度PECSのセットから何かを探し出そうとしていました。しかし、食べ物のところで見つからないらしく困っていました。私がそれを見て、「お兄さんと出かけて何か食べてきたの？」と聞くと、顔をくしゃくしゃにして喜んでいました。その日の連絡帳にその時のアダムの様子を書いて二日後、実はその週末アダムのお兄さんがアダムを散歩に誘って出かけたなら、途中でアダムがフライドチキンのお店に入ろうと指差したので、食べて帰ってきたと書いてあり、「フライドチキン」をアダムのPECSセットに加えて欲しいと書いてありました。私たちは嬉しさのあまりみんなでそれを回し読み、感激しました。アダムが家族の中で提案したり、自然なやりとりが成立していることがにじみ出ていたからです。

気が付くと徐々に私たちも家族とコミュニケーションが取れるようになってきました。ポジティブサポートに家族が参加しないにしても、協力体制ができてきたのです。

アダムのことを振り返り、私の中で様々なことが整理されていきました。自分の世界しか持っていないように見えたアダム。手探りしても手ごたえが持てなかった空しい時間。そして、始まったポジティブサポート。何も意味を成していない様なアダムの過去の個別教育計画書に対する憤り。それに反発するように勢いづいたどんな程アダムを知ることへの欲求／探究心。そして、アダムの意欲的な表現と関わりに対する向上心と吸収力。そこで改めて私たちが意識した可能性。そして、アダムが変えた家族との関わり。健全な変化の連鎖反応。

コミュニケーションがうまくいきアダムがPECSを使いこなしても、表現しきれないこともあります。お互いに行き違ったり、先取りしすぎてしまったりしてしまふことがあります。そこで、アダムが怒ったり泣いたりして訴え、私も自分の理不尽な態度や応対に気付き、アダムに謝るといったやりとりもできるようになりました。

た。その逆で、アダムも行き過ぎたことをして、誰かがアダムを怒るという場面も出てきました。そこには一緒に育んできた関わり方の深さと強さがあり、お互いに手ごたえが感じられました。表現力を身につけることで自分を意識しやり取りする喜びを知ったアダムは、徐々に、PECSセットだけに頼るのではなく、その場でどうにか表現する方法も見つけられるようになりました。

アダムは表現方法を得ることで、自分を意識するようになり、それと同時に周りの人を意識するようになりました。人と関わることの喜びを得ることと同時に、伝わらない時の悔しさを知ることにもなり、喜怒哀楽がはっきりしてきました。自己主張しながら、協調性を持つようになりました。他の人達と共有する世界が見えた時、アダムの中で「自分」が目覚め、一気に世界が開けたような感覚を彼は味わったのかもしれませんが。

もう後戻りのできないアダムにとって重要な変化を周

りの人達が受け止めてくれない時、アダムが動揺するのは当然でしょう。アダムはたくましく、その時その時の不自由感を訴えるようになり、周りの人々が協力的になる必要性を気付かせてくれました。アダムの自尊心、生きるエネルギーを感じました。その変化、つまり「今」という現実を受け止め共に変わっていくことが、どんなに私たちの生活の中で生きる手ごたえとして返ってくるか、そして、それが生きるエネルギーとして私たちの中で「希望」となること、それを教えてくれたのがアダムでした。

(ポジティブサポート研究室主宰)

註1 「ポジティブサポートの世界」(7) 変化が起こす変化(1)

『幼児の教育』第一〇三巻第六号

註2 PECS: Picture Exchange Communication Symbols

(Mayer-Jonson Co. 1994)